

愛すべき「独裁者」、ヴァレンタイン・ストラッサー
独裁者になれなかった為政者から考察するシエラレオネの国家と社会

岡野英之(立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員)

Beloved ‘Dictator’, Valentine Strasser
Examining State and Society from the NPRC Regime in Sierra Leone

Hideyuki OKANO (Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University)

アフリカで国家や政治のあり方が論じられるとき、その国の社会構造との関連が論じられる場合が少なくない。西アフリカの小国シエラレオネでも例外ではなく、首長制度や青年層問題、ビッグマンの影響、縁故主義との関係などで論じられることが多い。これらの議論が注目しているのは、そうした社会構造が国政の展開にいかに関与しているかである。それに対して本発表では、そうした社会構造が政治エリートの半生にも内在しているとみなし、その半生を考察することでシエラレオネの国家と社会との関係を捉えなおす。その考察のために本稿が取り上げるのが、1992年に成立した軍事政権「国家暫定統治委員会」(National Provisional Ruling Council: NPRC)である。中でも、その議長であるヴァレンタイン・ストラッサー(Valentine Esegbo Melvine Strasser)に注目する。

NPRC 政権が成立したとき、シエラレオネはすでに内戦の渦中であつた。学生運動から派生した過激派が反政府勢力「革命統一戦線」(Revolutionary United Front: RUF)を組織し、1991年から国境地帯で活動を展開していたのである。NPRC が成立するきっかけとなったクーデターは、前線に派遣された下級将校たちがその待遇に不満を持って引き起こしたものであつた。彼らはクーデター後、NPRC の構成員として国政に参加することになったが、それまでは国政とはまったく縁のない「庶民」出の存在であつた。

中でも、ヴァレンタイン・ストラッサーは、政権から去った後も庶民の生活を反映するような半生を辿っている。ストラッサーは、NPRC 発足時、弱冠 26 歳でその議長となつた。すなわち、その若さで国家の長となつたのである。ストラッサーは当初、十数年にもわたる一党独裁体制を打倒したヒーローとして庶民に歓迎されたが、その期待は時がたつとともに失望へと変わった。アフリカにおいて、そのお決まりの末路は暴力的な支配で強権政治を敷くことであろう(リベリアのサムエル・ドーがその代表例といえる)。ストラッサーも政敵を超法規的に処刑するなどしたが、独裁者にはなりきれなかつた(タイトルで「独裁者」と括弧を用いたのは、それが理由である)。ストラッサーは、共にクーデターを起こしたかつての盟友に1996年に政権を追われた。その後は権力を取り戻そうとすることもなく、あっさり政界から身を引いた。

その後、ストラッサーはイギリスへと留学してトラブルにあつたり、シエラレオネに戻って商売(petty trade)をはじめたものの失敗したりする。こうしたストラッサーの姿は、シエラレオネの庶民にとって親しみが持てる存在であつたようだ。彼はしばしばメディアに登場し、笑いの種になつた。その論調はかつての独裁者を批判したり、嘲笑するのではなく、ある種の親しみがこめられているように思える。そのストラッサーの姿には、為政者の独断で決まっていく意思決定、先進国への出稼ぎ者と自国の人々との関係、シエラレオネの国家と民衆の近さ、といったアフリカの政治や社会でしばしば語られる事象が具体的に見えてくる。

本発表では、ストラッサーの半生を見ることで、シエラレオネの国家と社会の関係を考察する。